

五島調査官（平成 30 年 9 月 11 日）との打ち合わせ事項について（報告）

・二の曲輪北馬出から中馬出に続く園路は、城が使用されていた時にどの位の幅であったか土塁はどの位置にあったのか本来の姿をまず解明（推定）すべき

・板塀の可能性は捨てきれないのではないか？なぜならば、中世の完全復元土塀だと薄くて数人で押せば、土塀が倒れてしまうので門とのバランスが悪い。したがって、板塀でも良いのではないか？

・土塀の方向で整備を進めていくにも、もう少し土塀の実例を調べて検討すべき

提案された土塀は厚みがあまりなく、戦闘の城である諏訪原城としては理解しがたい。

山城の場合、平城の場合、居館の場合を集めて、特徴を見出し、諏訪原城と比較する

・土塁の整備範囲について

西側は発掘調査の位置と同じなので OK

東側（通路）に関しては、再検討



今後やるべき作業について

①まず城が使用されていた当時、二の曲輪北馬出及び中馬出周辺は、どのような姿であったのか？通路の幅や土塀の状況などを示す必要がある。

図面を作成する必要がある。

②県内の山城で出ている土塀、板塀などの発掘調査の事例の収集。なければ県外の実例。また、支柱の素材と考えている松材の出土事例や文献で記載されているものがあるのか？

③中世の土塀は、薄いと考えられるが戦いにおいて十分に防衛機能を果たすものであったのか？あったとしたら、当時はどのような機能を持っていたのか？



③その上で当時の塀を復元するのか？できないのであれば、どのような手法、工法の整備をおこなっていくのか？

図面を作成する必要がある。（五島調査官に提示した図面を肉付けする必要あり）

土墨幅と土塀 確認作業

(検証日: H30. 11. 22)



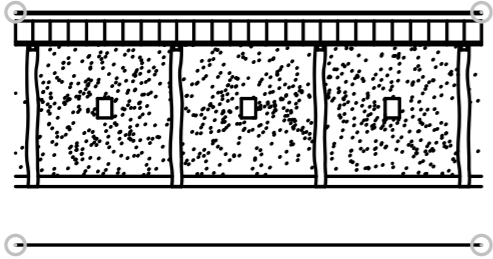
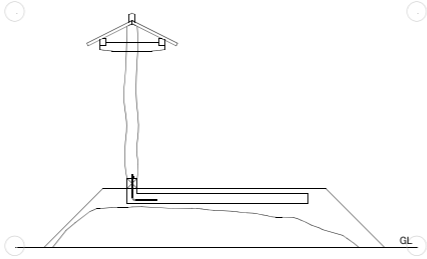
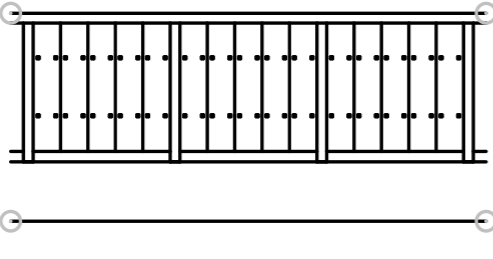
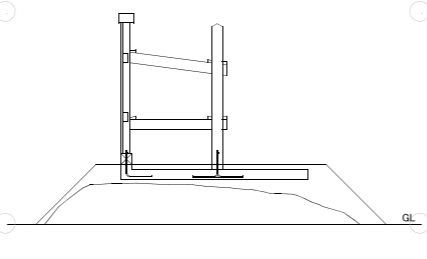
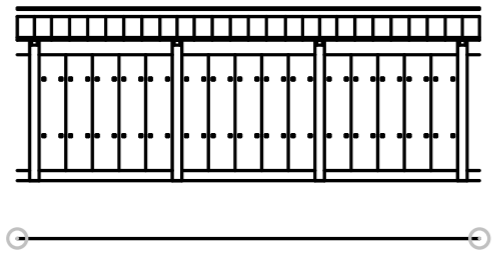
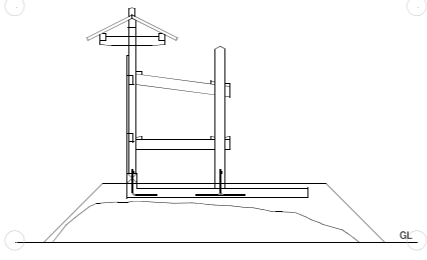
門周辺

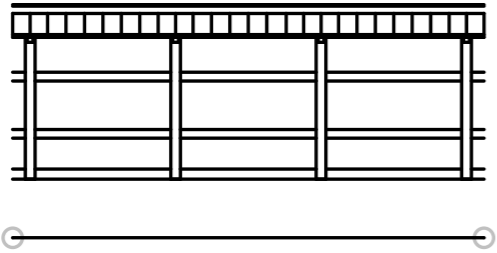
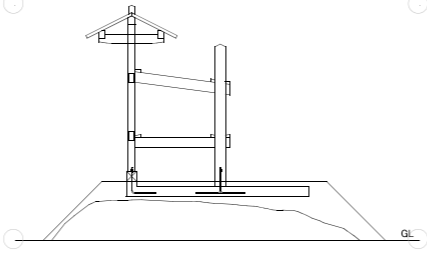
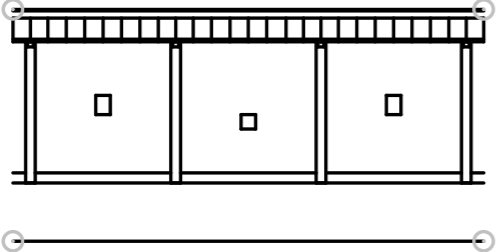
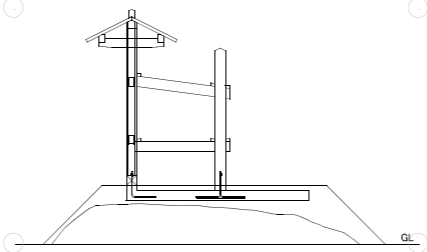
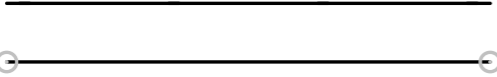



北馬出に行く通路

諏訪原城跡二の曲輪北馬出の整備について

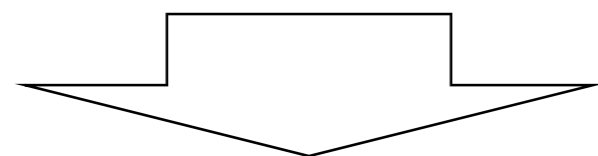
- 検討方針 ①復元した城門の周辺の整備について、様々な角度から検討する。
 ②二の曲輪北馬出の機能が見学者にも理解できる整備についても検討する。

	整備内容	立面図	断面図	提案理由	委員会での審議内容	評価	備考
①	中世土塀			当初計画していた漆喰土塀案以外の可能性についての審議	<p>中世の山城には、控え柱のない土塀が存在している。文献では、十二類合戦絵巻、秋夜長物語絵巻に土塀の様子がある。</p> <p>諏訪原城内本曲輪で土壁の破片出土事例あり。</p> <p>掘立柱の間隔については、県内の城の調査事例では、久野城（3度折れを持つ土塀を検出）で5尺間隔の事例あり。柱穴の形状から丸太使用。控え柱は確認されていない。16世紀は、森林資源枯渇の時代で用材が不足していたため、掘立柱は、直径5cmから7cm曲がった松の丸太を使用している。土塀は、竹小舞に粘土分の強い壁土を使用し、耐用年数は3年から5年である。</p> <p>整備をしても3年から5年で倒壊しては困るので、基礎にコンクリートを入れるなど20年以上は持つ工法を考えないといけない。</p> <p>①中世復元土塀として整備を行い、傷みが出たら市民参加で修復 ②一部分だけ、昔の工法にしてあとは、耐久性のある現代工法 ③外観は中世土塀の形にしてすべて現代工法</p> <p>以上、3つの案が考えられる。</p>	◎	
②	板塀			板塀の可能性について、審議を行うための提示	<p>諏訪原城内では、板塀と思われる部材の出土事例なし。</p> <p>居館を囲む事例として、板塀は存在する。 →江馬氏館跡主殿と庭園との境（国指定史跡）</p> <p>諏訪原城跡は、戦いの山城であるため、当時高級品であった木材を使用しているの板塀の可能性は低いと思われる。また、鉄砲玉や弓矢が貫通する可能性が高いため、諏訪原城での板塀の整備は、現実的ではない。</p>	×	
③	土塀風の板塀			板塀の可能性について、審議を行うための提示	<p>土塀型の板塀に関しては、歴史的事実はない。</p> <p>便益施設（転落防止）にしても、見学者に誤った見解を与えることになるため、整備にはそぐわない。</p>	×	

④	土塀の骨組み			土塀をすべて整備するのではなく、構造をみせる整備の可能性について	提示図面は、漆喰土塀案であるが、中世の土塀のどちらにしても、構造を知るためには、有効な手法ではあると考える。工事は、骨組みまでにして、市民参加で少しずつ土塀を塗り固めていく方法もあるのではないかと、出入りが自由にできてしまうため、見学者の誤解を招きやすい。	△	
⑤	近世土塀			当初計画していた漆喰土塀案で、他の案と比較するため提示	遺跡整備の手法としては、近世城郭の一般的な事例の土塀整備でも可能と考える。整備手法は、中世土塀案と同じ3種類 諏訪原城内で確認された土壁の破片には、漆喰の痕跡は確認されていない。 北馬出から中馬出に行く通路に関しては、多少の崩れはあるが、ほぼ現状を保っていると思われる。したがって、地理的なことを考慮すると、中馬出に続く園路は、控え柱のある近世土塀の可能性低いと考える。また、中馬出に続く通路で近世城郭の土塀整備した場合、堀の法面に土盛をして通路を確保しなくてはならないため現実的ではない。	—	
⑥	土塁のみ			土塁のみを整備し、土塁上構造物については、現段階では整備をしない手法について	土塁のみだと、見学者に二の曲輪北馬出の機能が伝わりにくい。しかし、土塁上の構造物の整備が不可能となった場合、サイン整備や遺構表示など二の曲輪北馬出の機能がわかる整備を考えていかななくてはならない。	△	

その他の特記事項

○土塀の規格について○
土塀の高さ「愚子見記」による高さ5尺を採用
掘立柱の5尺の間隔については、静岡県内の発掘調査成果を参考（久野城大手櫓形、5尺間隔で南北に6柱間、90度折れて東西に10柱間を検出）



以上の検討の結果、①**中世の土塀案**を採用で整備を進めたい。

○すでに復元した城門と今後整備を検討している城門周辺の土塁及び土塁上構造物を整備することによって、当時の城の状況を実体験してもらうのに極めて有効である。また、惣曲輪から二の曲輪北馬出、二の曲輪中馬出への導線を明確化にすることができる。

○整備を実施することによって、堀への転落の事故防止をするなど、史跡管理のために有益である。